

姉崎正治と日蓮

三 輪 是 法

はじめに

宗教学者・姉崎正治（一八七三～一九四九）は、高山樗牛（二八七一～一九〇二）との交流を通して日蓮信仰に入っていく。本稿は、もともとが浄土真宗仏光寺派の信徒であった姉崎が、東京帝国大学で哲学・仏教学を修学し、高山の日蓮論を批評する中で、自らの日蓮信仰を確立していくその過程を追う。¹

一、高山樗牛からの自立

姉崎が最初に書いた日蓮聖人に関する論考は、明治三十七年（一九〇四）、雑誌『太陽』に掲載された。この論考は、あくまで高山樗牛が残した日蓮論から、高山がなぜ日蓮聖人に傾倒したのかを分析するものであった。ところが、同年の年末に、日蓮宗の機関誌であった「日宗新報」に掲載された「高山樗牛を通して見たる日蓮上人」という講演記録では、表現に変化がみられるようになる。

姉崎正治と日蓮（三輪）

日蓮聖人降誕会での講演録は、三号にわたって連載され、高山を通して見た日蓮聖人像が、『太陽』に掲載された論考よりわかりやすく描かれている。姉崎は「日蓮上人は自信の人である、故に自ら信ずる処を貫かうとした人である」^②とし、通常、人間は「自ら信ずる所が貰けない」^③、「利益の為に色々心にもない事をする」^④、「利益があれば進んで往くが、利益がなければ退く」^⑤としてその違いを示し、日蓮聖人が個人的利益を目的とせず信仰を貫いた「吾々祖先の中に斯く迄自信の強い人」^⑥であると讃歎する。

高山は日蓮聖人の「自信の力」に感化され、感服にとどまらず、高山に「自信の力」が与えられたことを指摘して次のように述べる。

彼に取ては日蓮は外に浮かんで居る人物でない、（中略）日蓮の力が自分の内に流れ込んで居るのである、自分と日蓮との精神はどちらが、どちらに這入つたとは云はれない、全く一つに成つたのである。^⑧

さらに、姉崎は高山に生命力を与えた日蓮聖人の力が、今でも生き続けていることを付け加えている。

日蓮上人の力なるものは其肉体だけに存在して居つたもので無く、僅か五十年六十年の間彼が其関東に住んで居つたゞけの力では無いだらう、さうで無くして今日もまだ存在して居る力である。^⑨

日蓮聖人の力を得ようとしれない限り得ることはできない。「自分の心の窓を打開いて日蓮の人物を観れば、日蓮の光は存在して居る」^⑩という。それが信仰である。高山は日蓮聖人が到達した「予言の信仰」^⑪を自らも実践する。それは日蓮聖人から色説という法華経信仰を引き継ぐことであり、まさに自らが日蓮として日蓮を信仰するに他ならない。姉崎が高山の日蓮論を分析することで到達した結論は、姉崎自身を信仰へと導いていく。

この講演で、姉崎の言説が変化していることに気づく。

今日から云へば法華経は誰が何れの時代に書いたかと云ふやうな問題はでませうが、それは歴史の問題である、吾々の信仰に対して何等の影響する所はない、日蓮上人は茲に法華経がある、其法華経を信じて其信仰を貫くが爲めに如何なる困難も辞さない、其命をも捨てやうと云ふ勇氣を起した人である⁽¹²⁾

『太陽』の記事で指摘する「法華経は誰が書いたのか」という学問的問題を、信仰の立場で捉え直した言葉である。日蓮宗で行われた講演記録であるため、あるいは日蓮宗の機関誌の記事であったために、このような表現になった可能性もあり、そのように踏まえるならば、姉崎は学者としての視点と、高山の友人としての視点とを使い分けていたことになる。つまり、明治三十七年の段階では、姉崎は日蓮聖人の信仰者ではなかったことになる。しかし、次のような表白も確認できる。

私自身は元と日蓮上人を知らなかつたのでありますが、(中略)彼(高山)の精神を觀れば、彼は又た日蓮を信じ感服することに依て其力を得、其信を獲たやうに、自身も亦日蓮上人を追懐し、日蓮の信仰を追懐して、一つの大きな自信の力を与へられたるが如き感を起すのであります⁽¹³⁾(括弧内筆者)

姉崎は高山を通して知つた日蓮聖人という人物に感化されている。それは姉崎が分析した高山同様、姉崎の精神と日蓮聖人が一つになることを経験したことに他ならないといえよう。

姉崎が自ら日蓮信仰を自覚し始めたとはいへ、その態度はいまだ冷静だつた。明治四十二年(一九〇九)、本多日生がこの年に組織した天晴会に入会する⁽¹⁴⁾。天晴会は、本多日生の声かけで明治二十九年(一八九六)に創設された日蓮系八教団による「統一団」を発展させた組織で、姉崎は入会した折りに執筆した短い随想に、次のように述べている。

予自身は未だ日蓮教徒とは云へぬ、(中略)予の会員となりしは如何と云ふに、一は人を透して、一は法を透し

て、因縁の熟する所、また多少の信ずる所があるからである。¹⁵⁾

入会したものの、姉崎自身「日蓮教徒」とは言えないが、会員となった理由を、二つの方向から示している。一つが人によること、二つが法によることである。日蓮信仰の原因となった人とは、もちろん高山樗牛である。今まで述べてきたように、高山を通して見た日蓮聖人に魅せられたことを次のように表現している。

予の唯一の親友を透して見たる日蓮上人の人格は、頗る偉大であつて、上人の人格の中に予の小なる人格を撰取せらるゝを覚へ、（中略）予も亦此感（日蓮上人を透して法華經を知ること）を以て上人の遺書を拝するときは、上人嘗て教主釈尊の我身に宿り給ふと云へりしが如く、予の罪ある穢れたる小なる肉体にも亦上人の宿り給ふて、人格の光明を發見し得べしと信ずるのである、それは決して漠然たるものではない、頗る明白に自覚するのである。¹⁶⁾（括弧内筆者）

この記述から、姉崎が本格的に日蓮遺文を読み始めたことを知る。そのきっかけは間違いなく高山の影響である。ただし、日蓮遺文を読む精神において、「上人の遺書を拝するときは、上人嘗て教主釈尊の我身に宿り給ふと云へりしが如く、予の罪ある穢れたる小なる肉体にも亦上人の宿り給ふて、人格の光明を發見し得べしと信ずる」と日蓮聖人と感応道交することを言表することも見取れる。この心境はまさに高山と同じ境界に至ったことを示している。ただし、大乘仏典である法華經に関しては、学者としての視点を變えてはいない。日蓮研究に至った人的要因は高山樗牛という存在だったが、法的要因は仏教学者としての研究対象である阿含經典をあげる。自らを「阿含の徒」としながら、原始仏典である阿含經典に立って、法華經を仏教經典の中に位置づけている。

今一つ法の側を云へば、法とは阿含である、有体に云へば予は阿含の徒である、則ち釈尊の親説法は阿含に伝へ

たるを確信するのである、此点を研究するのが、予の志望と事業の大部分である、(中略) 元來阿含は積尊の親說法の事實を切々に書き伝へたるものである、然らば此の切々なる事實を基礎として、その上に綜合統一を与ふる所の經典は無いのであらうか、此の思想を以て法華經を見るに阿含の切々なる事實に系統を与へたるものは法華經であつて、法華經其ものは実に此問題を解決せし統一的大經典たることを信じられる⁽¹⁷⁾

すなわち、仏教の起点として編集された阿含經典は、法華經に基づいて編纂されたのであり、「統一的大經典」としている。つまり姉崎は、仏教研究者としての立場を保持しながら、阿含經典を法華經から内容的に遡つて確認するといふ、日蓮聖人と同じ教判に立つ日蓮仏教信仰者として会通させているといふことにならう。

姉崎が持つ仏教研究者としての自負と、高山によつて導かれた信仰者としての自覚は、やがて自立した日蓮論となつていく。明治四十四年(一九一一)に書かれた「生死」という天晴会の講演記録には、高山を通さない、姉崎の日蓮論が展開している。そこには「阿含の徒」と自認する姉崎と、日蓮信仰者としての姉崎の双方が確認できる。

当時の日本の現況を蔑み、「墮落した書生の自然主義、現実主義、半獸主義、それから終には墮落不平家の無政府党⁽¹⁸⁾」と表現しつつ、その根本的原因について、「生死の問題をあきらめない」「生命の意義を知り得ない」ためであると指摘する⁽¹⁹⁾。だからといつて生前死後について思い悩む必要はない。仏陀の教訓として、中阿含經の「愼莫念過去亦勿願未來 過去事已滅 未來復未至 現在所有法 彼亦當爲思⁽²⁰⁾」を引用した後、「現在は無始無終の大時間の一瞬、過去と未來との境目⁽²¹⁾」であり、「現在に就いて切實直接の經驗に基いて過去未來を思はなければ、三世は空理たるに過ぎ⁽²²⁾」ず、人生を空理に過ごさないために、生まれてくる以前の無限に遡る過去と、死後久遠の未來を現在の生に結びつけなければならぬと説く⁽²³⁾。ではその教訓を証明する人物とは誰か。

我々の眼前にこの三世関聯の大消息を一生の行動と自覚とに現はし、此の生死の一大事につけて活きた教訓を垂れた大聖が居ますではないか。⁽²⁴⁾

二月十六日、六八九回の日蓮聖人降誕会にちなみ、この講演は行われた。日蓮聖人の一生を「現在」と見て、姉崎はその一生を日蓮遺文で辿っていく。

姉崎は日蓮聖人の出生を『佐渡御書』に尋ねる。

何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅（漁者）が家より出たり。心こそすこし法華経を信たる様なれども、身は人身に似て畜身也。魚鳥を混丸して赤白二滞とせり、其中に識神をやどす。濁水に月のうつれるが如し。糞囊に金をつ、（包）めるなるべし。⁽²⁵⁾

『佐渡御書』の経年は文永九年で、佐渡で書かれた遺文である。姉崎は、この時の日蓮聖人の心理について、「日本の柱、日本国の眼目、日本国の大船を以てし、過去の上行、不軽の再生、末法の大導師として未来万年の人生救済は自己一人の慈悲に係つて存すと信ぜられた」と表現している。⁽²⁶⁾

身延山隠棲の覚悟については『南条七郎殿御返事』を引用する。

此処は人倫を離れたる山中也。東西南北を去て里もなし。かゝるいと心細き幽窟なれども、教主釈尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸仏入定の処也。舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は正覚の砌なるべし。かゝる不思議なる法華経の行者の住処なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき。法妙なるが故に人貴し。人貴きが故に所尊と申は是也。⁽²⁷⁾

日蓮聖人の覚悟は佐渡から引き続き、人身という有限の存在と、久遠の釈尊の時間に基づく三世の仏性が、自らの

身に一つになり、「法華經の行者」として現れている。その自覚の根柢は法華經色説に基づく。⁽²⁵⁾ 釈尊は人身始覺として
仏陀となり、法華經で久遠本覺の如来を顕かにした、やはり一つの人格に具わっている。これを不合理とせず、釈尊
の実語として堅固に信行受持するところに日蓮聖人の布教がある。姉崎は、『立正安国論』献上から伊豆流罪、そして
佐渡流罪に至るまでの法華經の行者自覚について、龍口法難二年前に書かれた『法門可被申様之事』を引用して日蓮
聖人の心象を紡ぐ。

法華經の行者なければ大菩薩の御すみかをはせざるか。但日本国には日蓮一人計こそ世間・出世正直の者にては
候へ。(中略) 又聖人は言をかざらずと申。又いまだ顕ざる後をしるを聖人と申か。日蓮聖人の一分にあたり。

此法門のゆへに二十余所をわれ、結句流罪に及、身に多のさずをかをほり、弟子をあまた殺せたり。(中略) もし
しからば八幡大菩薩は日蓮が頂をはなれさせ給てはいづれの人の頂にかすみ給はん。⁽²⁶⁾

日蓮聖人の生涯において、法華經の行者自覚を中心にすれば、伊豆流罪までは序分であるという。正宗分の幕が
上がるのは、文永八年九月十二日、龍口法難からであった。生死の境界を越えたとき、釈尊予言の行者と自覚され、
施陀羅の子として房州に生まれた日蓮聖人は、過去久遠の時に連なる存在となる。⁽²⁷⁾

譬喩品云見有読誦書持經者輕賤憎嫉而懷結恨。法師品云如来現在猶多怨嫉況滅度後。勸持品云加刀杖乃至數見
擯出。安樂行品云一切世間多怨難信。此等は經文には候へども何世にかゝるべしともしられず。過去の不輕菩薩・
覺德比丘などこそ、身にあたりてよみまいらせて候けるとみへはんべれ。現在には正像二千年はさてをきぬ。
末法に入ては此日本国には當時は日蓮一人みへ候か。(中略) 今日蓮法華經一部よみて候。一句一偈に猶受記をか
ほれり。何況一部をやと、いよいよたのもし。⁽²⁸⁾

つづけて『転重軽受法門』の一節を引用して、日蓮聖人が末法弘通の使命を久遠の中で捉えていたことを指摘し、『寺泊御書』から佐渡へ向かう心中をうかがう。

今月（十月也）十日、相州愛京郡依智の郷を起つて、（中略）十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ。ここより大海を巨て佐渡の国に至らんと欲す。順風定まらず、その期を知らず。道の間の事、心も及ぶことなく、また筆にも及ばず。ただ暗に推し度るべし。また本より存知の上なれば、始て歎くべきにあらずと、これを止む。（中略）法華経は三世説法の儀式なり。過去の不軽品は今の勸持品。今の勸持品は過去の不軽品なり。今の勸持品は未来、不軽品たるべし。その時は日蓮はすなわち不軽菩薩たるべし。（中略）当時当世三類の敵人はこれあるに、ただし八十万億那由他の諸菩薩は一人も見えたまわず。乾潮の満ちざる、月の虧て満ちざるがごとし。水清まば月を浮べ、木を植えれば鳥を棲しむ。日蓮は八十万億那由他の諸の菩薩の代官としてこれを申す（原漢文）³⁵。

さらに、十一月二十三日佐渡塚原三昧堂で書かれた『富木入道殿御返事』³⁶と、一谷での『開目抄』³⁷によって日蓮聖人の上行菩薩自覚を捉え、生涯における正宗分と位置づけた上で、『諸法実相抄』³⁸を未来弘経の使命を述べた遺文と定める。

此の如くにして、上人の一期六十年は、実にこの現在の一瞬に三世を収め、多難迫害の中に過去の宿命を悟り、現身の修行に未来万年の基本を開顕し來つた。（中略）この束の間の一期には、無限の三世を包容する大生命が現はれ、この生命は即ち三世貫通の妙法の色読となり、一部二十八品の実証となつたのである。³⁹

姉崎は講演で、他にも『聖人知三世事』『報恩抄』『三大秘法稟承事』『寂日房御書』など、多くの遺文を引用しながら、釈尊の予言に基づく自覚という心理的動向から、日蓮聖人が生死を超えた三世の時間に生きたことを証明してい

ところで、姉崎が日蓮遺文に対峙するようになるのはいつからであろうか。明治三十六年（一九〇三）、留学から帰国した姉崎が高山の家族を見舞い、その足で高山の墓参に動いたことはすでに確認した⁽³⁸⁾。この時期、すなわち明治三十六年七月八月の日記にその変化が記されている。

七月二日、大阪の立正閣に田中智学を訪ねた姉崎は、山川智応とも面会し、この夏を過ごすために下宿を決めた興津に戻る。七日、高山の業績を編纂する作業のために宛てた、高山の弟である斎藤信策へ手紙に、高山が日蓮によって慰藉を得たことに対して、姉崎自信はむしろキリストによって救いがあることを記している⁽³⁹⁾。この信仰は、法華経の解釈についても影響を与えている。すなわち、法華経の「久遠実成」の解釈をめぐる問題である。

一二日に大阪の立正閣より、雑誌『妙宗』が数冊送られてくる。翌日、礼状を山川宛に送る際に、姉崎は久遠実成の仏陀と無始のロゴスについて考察した文章を送っている⁽⁴⁰⁾。その内容は、無始のロゴスであるヨハネ伝のキリストと、法華経の久遠が示し時間の方向性について述べられたもので、二十五日の日記に次のように記されている。

エツクハルトの胸に宿りしキリストは、時と処とを外にして不断に生まれ、法華法座の仏陀は釈氏の宮に生まれずして「我常住於此」と宣す。キリストと現はるるロゴスよ、仏身を現する妙法よ、吾が念々生々の中に久遠の寿量を実現せしめよ。汝の太古の光をして日に新に我が中に生まれしめよ。過ぎし三十年と来ん幾年かの吾が肉親の生をして永く永遠の現在に融解せしめよ⁽⁴¹⁾。

久遠の釈尊とは、キリスト教というロゴスであり、仏身はまさに妙法蓮華経というロゴスの顕現だという。そのロゴスは、永遠の現在である未来のために「常住」している。姉崎は、『妙宗』に掲載された田中智学の論考に裏づけを

得て、自らの解釈が正しいことを確信している。この頃、姉崎が持つ法華経や日蓮聖人に関する知識は、高山の日蓮論の他に、田中の論説に基づいていた。⁽⁴²⁾

八月に入り、高山の遺作の編集作業が進むにつれ、姉崎は否応なしに日蓮遺文を読むようになっていく。⁽⁴³⁾それは高山の日蓮論と日蓮遺文を校合する作業においてであった。作業を進める中、『報恩抄』を読了する。

日蓮上人の報恩抄上下を読み了る。法華妙法の伝統を叙する前半の文に於ては、他の平凡なる仏者經典拘泥の仏教学者と多く異なるを発見する能ず。されど此伝統の叙述は実に法華の行者の多難を明にせんが為にして、而して此の多難多怨は即ち上人自身が本化上行の自覚を証明する為なるを思へば、亡友が見たる日蓮の面影稍見ゆる心地す、神国王書亦同様の感を以て読まれぬ。⁽⁴⁴⁾

この他にも二十五日の記述には『下山御消息』を読了したことが確認できるが、遺文を読み始めた当初、いたって否定的な見方にとどまっていたことがわかる。日蓮聖人が阿弥陀仏と釈尊の優劣を述べた部分については、「殆ど頑童の一徹我意を主張するに似たり」と評し、この遺文を読む際には「小児の心を以て書かれたる者は、又小児の心を以て読むを要す⁽⁴⁵⁾」と一蹴している。

三、自立後の日蓮信仰

日蓮聖人に対する否定的に捉えていた留学帰国直後から、高山樗牛の日蓮研究を通して知るに至る日蓮像、その後高山に依存しながらも信仰者として自立して語っていく姉崎自信の日蓮像の変遷を確認してきた。明治四十四年以降の姉崎の論考は、日蓮聖人と直接対峙した日蓮論が展開している。確かに高山に言及する講演もおこなっているが、

それはあくまでも高山が日蓮聖人をどのように捉えたか、というテーマに終始するもので、高山の日蓮観を論じるものであった。

姉崎が高山の日蓮論から自立していく段階に至るまでには、日蓮聖人との直接的対峙、つまり遺文との接触が必然的であった。しかし、それより数年前に最初の身延山への参詣を行っていた。田中智学を大阪の立正閣に訪ねたその年、明治三十九年である。目的は日蓮聖人が隠棲した場所を尋ねるということで、姉崎自身心待ちにしていたことだった。道程は船で甲府側から富士川を下る。陸に上がり、寒村を抜けて、老杉立ち並ぶ総門に至る⁽⁴⁶⁾。姉崎は総門を前にした時の心境を次のように綴っている。

是れぞ身延の総門額には開会關の字、此の門を入る者をして先づ衆生を会して同一乘に入る妙法開会の旨を思はしむ。思ふに日蓮隱棲以来六百年、此の地点を過ぎ此の門を過ぎし者幾百千ぞ。而して仮令へ未だ全く法華を信ぜざる者にてても、身延に詣でし者にして、多生上人の徳を思ひ力を仰ぎ、その跡に對して一片の敬虔の情を起さざる者あるべきや。況やその教恩に浴し、唱題に安心の地を得、上人の遺薫を慕ひ、百里の地を遠しとせず、十里の險を踏むて、先づ此の門を見、この門に入る者にありては、その衷情、懐古の涙にむせび、歡喜の光に充たさる、思ひなからでやは⁽⁴⁷⁾。

これ以降、姉崎は晩年まで身延山を幾度となく参詣するが、この時すでに、身延山中に日蓮聖人を感じていた姉崎自身を自覚していた可能性が確認できる。

明治四十五年（一九一二）、明治最後の年には、本多日生の声かけて明治二十九年に創設された日蓮系八教団による「統一団」の機関誌、『統一』に「在島三年⁽⁴⁸⁾」と「統一と開顯⁽⁴⁹⁾」が掲載される。大正二年（一九一三）から四年（一九

一五）の二年間にわたるアメリカ・ハーバード大学での講義期間を終えて帰国すると、大正五年（一九一六）、友人の畔柳芥舟や笹川臨風らと雑誌『人文』を創刊し、⁽⁵⁰⁾「龍ノ口の夜半の風」「佐渡流罪赦免と身延退隱」「四條金吾頼基（上）（中）（下）」「日蓮上人の身延隱棲」「四條金吾について補遺」を立て続けに執筆、⁽⁵¹⁾十月にはこうした考察の集大成である『法華経の行者日蓮』を世に問う。序文によると、この著書は、すでにハーバードに滞在中に英文で著された“Nichiren, the Buddhist Prophet”（後に同時にハーバード大学から出版）とその内容を一にしており、「前後十四五年、特に最近六七年の間、直接に上人の遺文に接した努力の結晶である。而してその研究には、常に宗教学上の通義、特には宗教心理上の比較考慮を費やした」と述べるように、日蓮研究者の解釈に影響されることなく、姉崎の表現を借りれば、日蓮聖人が姉崎に「宿り給」⁽⁵²⁾いて書かされたといえるであろう。

その後、大正三年（一九一四）に発起人に名を連ねて創設した「法華会」の雑誌である『法華』と『人文』を中心に論述を展開し、十数年にわたり読み続けた日蓮遺文に関する論考、「日蓮聖人遺文の批評的研究」を大正六年（一九一七）に二回にわたり発表し、⁽⁵⁴⁾『史学雑誌』にも「史料としての日蓮上人遺文」を掲載している。⁽⁵⁵⁾

これらの論考は、姉崎が日蓮聖人遺文を書誌学的に考察したもので、遺文の真偽について、遺文中の歴史的記載事項や表現などを基に、検討考察を加えている。この事実から勘案すると、姉崎の遺文の読み込みは相当深かったのではないだろうか。日蓮聖人の視線で当時の出来事を感じ、その心理にまで至るといえることは、姉崎が高山を評している、自らが日蓮聖人と一体化することであり、ここにも姉崎の信仰の深化が確認できる。⁽⁵⁶⁾

では姉崎が本来信仰していた浄土真宗への想いはどうなったのだろうか。ここで大正十一年（一九二二）、『法華』に掲載された講演記録、「与同罪即ち共同責任」⁽⁵⁷⁾にその答えを確認してみたい。

与同罪は連帯責任、共同責任ということで、宗教についてみれば、古来罪や救いということと関係し、個人的救済を目指す宗教もあれば、共同救済をする宗教もある。つまり、姉崎は個人の救済を目指す宗教なのか、国民全体を救済する宗教なのか、その違いを確認する。後者の宗教としては日蓮宗が近いという。信仰者が太鼓をたたいて御題目を唱えるところに正議があり、救いがあり、仏国土があるという信仰で、そのための弊害を指摘すれば、各個人が自己の精神を見つめる余裕がなくなり、群衆心理の状態、個人的に善悪の判断がなくなり、集団の正議に呑み込まれてしまう。それに対して個人救済の宗教は法然上人と親鸞上人の宗教で、親鸞上人の「弥陀の本願は親鸞一人の為なり」「父母の為とて念仏一度唱へたるなし」という言葉がそれを象徴している。弥陀の本願とは一切衆生を救うということであり、それを一方的に自分自身だけの救済に求めることは矛盾しているのではないか。⁽³⁸⁾

姉崎のこの比較救済論は、すでに前年の『法華』の「罪に関する日蓮上人の懐抱（承前）——（身延退隠までの心理的発達）——」で述べられている日蓮聖人の罪意識を基底に考察されている。特に佐渡流罪中の日蓮聖人の想いに則って述べられ、大難に遭うのは過去謗法の罪過のためであり、その償いのためである。ただし法華経の行者は「単に自己一家の懺悔滅罪を以て満足する者でない」。「三世諸仏と同一の道を歩み、この仏道に依つて一切衆生を導く」のであり、「無尽の衆生を引率して一乘に進ましめ、衆生と自分と共に同じく成仏するにあらずんば満足しない」という。⁽³⁹⁾このように確認してみると、姉崎は浄土真宗の信仰から完全に日蓮信仰に改宗したといえるであろう。

昭和十一年（一九三六）、姉崎は身延山の御廟整備委員となる。四月に身延山で行われた委員会に出席し、どのような建築物にするかという問題について次のように述べている。

御廟所は総てが九ヶ年の御聖居をよりよく偲び得るような様式と、又豪華の殿堂を造営して驚嘆せしめる様式と

の二つあると思ひますが、御廟所は前者がよいと思ひます。何れの参客もいと静かに心ゆくまで自由に参り得るようにしたい、周囲の山と靈域とが極めて自然のまゝを保つてゐて、此の山林の中に大上人様の御魂の住み玉ふたいかにも、棲神の靈地たらしめたい。⁽⁸⁰⁾

高山樗牛の日蓮研究に出会つて以来、姉崎の日蓮信仰は退転することはなかつたといえるであらう。ハーバード大
学時代を経て、『法華経の行者日蓮』を出版したことは、姉崎の日蓮信仰が確固たるものになつたことを象徴してい
る。昭和九年（一九三五）三月に東京帝国大学を定年退職すると、昭和十二年（一九三七）まで毎年身延に詣でた。
第二次世界大戦が終わりを告げる前年、昭和十九年（一九四四）八月には、空襲を避けるため身延山に疎開する。姉
崎はその時の様子を次のように綴っている。

それやこれやで疎開を考へ始めたが、自分の身と共に、又は其よりも先に家宝ともいふべき物数点の疎開は事容
易であるから、考は先づ其方に向つた。その最は日蓮大聖の御真蹟断簡である。（中略）せめてこの一幅だけでも
早く避難疎開したいと考へてゐた。⁽⁸¹⁾

姉崎は、京都のある人物から譲り受けたこの断簡を、身延山に戻すべく動こうとしていたが、断簡には「なつのこ
ろは」「御わたり」と書かれており、まるで日蓮聖人が「夏になつたらこつちへ来なさい」と言つてゐるよ
うに感じたという。身延山での滞在については四條金吾隠棲跡である端場坊を希望した。姉崎は四條金吾を常日頃敬慕して
おり、三男に「金吾」と命名するほどであった。現在、身延山大学学長室には姉崎正治の詩の額が掲げられてい
る。

小 結

姉崎正治の日蓮信仰は、高山樗牛の信仰を通して始まった。その特徴は、姉崎自身が高山の日蓮論を分析したように、日蓮聖人が身体に入り、一体化するという精神的に深化した信仰であった。その契機は、日蓮遺文を徹底的に読み込むことで、日蓮聖人と感応道交するものであった。姉崎が指摘するとおり、日蓮聖人は遺文のなかに生き続け、時代を超えて教えを説き続けているといえるであろう。

注

- (1) 本稿は、拙稿「近代日本における日蓮信仰の諸相——姉崎正治の場合——」(庵谷行亨先生古稀記念論文集『日蓮教学』、二〇一八年)に続く考察である。
- (2) 「日宗新報」(明治三七年)八八一号、五頁。
- (3) 右同書、六頁。
- (4) 右同。
- (5) 右同。
- (6) 右同。
- (7) 「日宗新報」八八二号、七頁。
- (8) 右同書、九頁。
- (9) 右同。
- (10) 右同。
- (11) 「日宗新報」八八三号、七頁。

- (12) 「日宗新報」八八二号、六頁。
- (13) 「日宗新報」八八二号、八頁。
- (14) 大谷栄一著『近代日本の日蓮主義運動』（法蔵館、二〇〇一年）、八二頁。
- (15) 『統一』（明治四十二年二月十五日、No.108）「法華経及び日蓮上人に対する予の態度」、一〇頁。
- (16) 右同書、十一頁。
- (17) 右同論、十一頁。
- (18) 『統一』明治四十四年四月十五日、No.194、一四頁。
- (19) 右同。
- (20) 右同。『大正藏経』第一卷、「中阿含経」第四十三、六九七頁a。姉崎の引用は訓読されている。
- (21) 『統一』No.194、一四頁。
- (22) 右同書、一四～一五頁。
- (23) 右同書、一五頁。
- (24) 右同。
- (25) 姉崎が引用する遺文集は、明治三五年（一九〇二）に出版された霊良閣版『日蓮聖人御遺文』であるが、ここでは『昭和定本 日蓮聖人遺文』（以下、『昭和定本』）の文を引用し、頁を指示する。一六二頁（真蹟・写本なし）。
- (26) 『統一』No.194、一五～一六頁。
- (27) 『昭和定本』、一八八七頁（真蹟・写本なし）。
- (28) 『統一』No.194、一六頁。
- (29) 『昭和定本』、四五五～四五六頁。
- (30) 『統一』No.194、一八頁。
- (31) 『昭和定本』、五〇八頁。
- (32) 『昭和定本』、五一二～五一五頁。読み下し文は『日蓮聖人全集』に基づく。
- (33) 『昭和定本』、五一六頁（真蹟・写本なし）。二月は寒風頻に吹て、霜雪更に降ざる時はあれども、日の光をば見ること

なし。八寒を感現身。人の心は同禽獸不知主師親。何況仏法の邪正師の善悪は思もよらざるをや。此等は且置之。(中略) 天台伝教は粗釈し給へども弘残之一大事の秘法を此国に初て弘之。日蓮豈非其人乎。(中略) 法已に顕れぬ。前相先代に超過せり。日蓮粗勘之是時の然らしむる故也。経云有四導師一名上行云云。」

(34) 『昭和定本』、五五六―五六〇頁。「此に日蓮案云 世すでに末代に入て二百余年、辺土に生をうく。其上下賤、其上貧道の身なり。(中略) しらず大通結縁の第三類の在世をもれたるか、久遠五百の退転して今に來か。法華經を行ぜし程に、世間の悪縁・王難・外道の難・小乗經の難などは忍し程に、権大乘・実大乘經極たるやうなる道綽・善導・法然等のごとくなる悪魔の身に入たる者、法華經をつよくほめあげ、機をあながちに下し、理深解微と立、未有一人得者千中無一等とすかししものに、無量生が間、恒河沙度すかされて権經に墮ぬ。権經より小乗經に墮ぬ。外道外典に墮ぬ。結句は惡道に墮けりと深此をしれり。日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠国王王難必來べし。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、法華經・涅槃經等に此二辺を合見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮べし。いうならば三障四魔必競起るべしとし(知)ぬ。二辺の中にはいふべし。王難等出來の時退転すべくは一度に思止べし、と且やすらい(休)し程に、宝塔品の六難九易これなり。我等程の小力の者須弥山はなぐとも、我等程の無通の者乾草を負て劫火にはやけずとも、我等程の無智の者恒沙の経々をばよみをほうとも、法華經は一句一偈末代に持がたとし、とかる、はこれなるべし。今度強盛の菩提心をこして退転せじと願しぬ。既に二十余年が間此法門を申に、日々月々々に難かさなる。少々の難はかずしらず。大事の難四度なり。二度はししばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすでに我身命に及。其上弟子といひ、檀那といひ、わづかの聴聞の俗人など来て重科に行る。謀反などの者のごとし。法華經第四云 而此經者如來現在猶多怨嫉況滅度後等云云。(中略) 在世猶をしかり、乃至像末辺土をや。山に山をかさね、波に波をた、み、難に難を加へ、非に非をますべし。像法の中には天台一人、法華經一切經をよめり。(中略) 像の末に傳教一人、法華經一切經を仏説のごとく説給へり。(中略) 今末法の始二百余年なり。況滅度後のしるし(兆)に鬪諍の序となるべきゆへに、非理を前として、濁世のしるし(驗)に、召合せられずして流罪乃至寿にもをよばんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は天台伝教には千万が一分も及事なけれども、難を忍び慈悲すぐれたる事をそれをもいだきぬべし。定て天の御計にもあづかるべしと存ずれども、一分のしるし(驗)もなし。いよいよ重科に沈。還て此事計みれば我身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此国をすて、去給るか。かたがた疑はし。

而に法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此国に生ずは、ほとをど（殆）世尊は大妄語の人、八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ぬべし。經に云 有諸無智人惡口罵詈等、加刀杖瓦石等「云云」。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加る者ある。日蓮なくば此一偈の未來記妄語となりぬ。惡世中比丘邪智心詔曲。又云 与白衣說法為世所恭敬如六通羅漢、此等經文は今の世の念仏者・禪宗・律宗等の法師なくば世尊又大妄語の人、常在大衆中乃至向国王大臣婆羅門居士等、今の世の僧等日蓮を譏奏して流罪せずば此經文むなし。又云 数々見擯出等「云云」、日蓮法華經のゆへに度々ながされずば数々の二字いかんがせん。此の二字は天台傳教いまだよみ給はず。況余人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。」

(35) 『昭和定本』、七二五〜七二九頁。「日蓮末法に生れて上行菩薩の弘め給べき所の妙法を先立て粗ひろめ、つくりあらはし給べき本門寿量品の古仏たる釈迦仏、迹門宝塔品の時涌出し給ふ多宝仏、涌出品の時出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顯し奉る事、予が分齊にはいみじき事也。（中略）地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人也。地涌の菩薩の教にもや入なまし。若日蓮地涌の菩薩の教に入らば豈日蓮が弟子檀那地涌の流類に非や。經云能窃為一人說法華經乃至一句当知是人則如来使如来所遣行如来事。豈別人の事を説給ならんや。（中略）いかにも今度信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給べし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑や。經云我從久遠來教化是等衆とは是也。末法にして妙法蓮華經の五字を弘ん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非んば唱へがたき題目也。（中略）多宝仏は半座を分て釈迦如来に奉り給し時、妙法蓮華經の幡をさし頭し、釈迦多宝の二仏大将としてさだめ給し事あにいつはりなるべきや。併ら我等衆生を仏になさんとの御談合也。日蓮は其座には住し候はねども、經文を見候にすこしもくもりなし。又其座にもやありけん。凡夫なれば過去をしらず。現在は見へて法華經の行者也。又未來は決定として当詣道場なるべし。過去をも是を以推するに虚空云にもやありつらん。三世各別あるべからず。（中略）此の如く思ひつづけて候へば流人なれども喜悅はかりなし。うれしきにもなみだ、つらきにもなみだなり。（中略）現在の大難を思つづくるにもなみだ、未來の成仏を思て喜にもなみだせきあへず。鳥と虫とはなけ（鳴）どもなみだをちらず。日蓮はなかねどもなみだひまなし。此なみだ世間の事には非ず。但偏に法華經の故也。若しからは甘露のなみだとも云つべし。（中略）総じて日蓮が身に当ての法門わたしまいらせ候ぞ。日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん。」

- (36) 『統一』No.194、二六～二七頁。
- (37) 右同書、二三～二七頁。
- (38) 拙稿「近代日本にみる日蓮信仰の諸相——姉崎正治の信仰——」参照。
- (39) 島蘭進編『姉崎正治集』第4巻（クレス出版、二〇〇二年）、『停雲集』「清見潟の一夏」、一一～一五頁。
- (40) 右同書、一九～二〇頁。
- (41) 右同書、二七～二八頁。
- (42) 右同書、二〇～二四頁。この頃の日記には『妙宗』の記事である「獅子王瑣言」の引用が見られる。引用文は『師子王瑣言』（天業民報社、一九二二年）、一一頁、一七頁に確認できる。
- (43) 右同書、三四頁。
- (44) 右同書、三九頁。
- (45) 右同書、四八頁。
- (46) 右同書、『停雲集』「身延詣で」、七五～七六頁。
- (47) 右同書、七七頁。
- (48) 『統一』No.204（明治四十五年二月十五日）、一〇～一二頁。
- (49) 『統一』No.207（明治四十五年五月十五日）、一六～二四頁。
- (50) 磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教——姉崎正治の軌跡——』（東京堂出版、二〇〇二年）、七六頁。同著、「第三部 姉崎正治年譜」、二六九頁。
- (51) 東京帝国大学文学部宗教研究室 嘲風会編集発行『姉崎正治先生 書誌』（一九四五年）、六六～六七頁。
- (52) 姉崎正治著『改訂 法華経の行者日蓮』（ニチレン出版、一九五三年）、「初刊序言」、九頁。
- (53) 『統一』No.168（明治四十二年二月十五日）「法華経及び日蓮上人に対する予の態度」、一〇頁。
- (54) 『法華』第四巻（東方出版株式会社、一九七九年）、八三～一〇〇頁（大正六年第一号）、及び一八二～一八五頁（同年第二号）。
- (55) 『史学雜誌』第二十八編第三号（大正六年三月二十日発行）、一～三十六頁。

(56) 昭和二年に発行されるようになる日蓮宗の伝道雑誌『日蓮主義』（昭和五年七月号、二十六頁）の「日蓮聖人の御遺文拝読の感激と題された記事には、短いコメントながら次のようにある。「『最も』といふ比較は困難です、感激といふのも、時の事情により、又種類によつて違ふ事と存じます、たゞ通常の人情といふ点から見て、新尼御前御返事の『故郷の海苔』はいつ読むでも涙を催します。」

(57) 『法華』第九卷、五一―五二六頁（大正二一年第六号）、六三〇―六四二頁（同年第七号）。

(58) 『法華』第九卷、五二四―五二五頁（大正二一年第六号）。

(59) 『法華』第八卷、一一二―一二頁（大正二〇年第一二号）。

(60) 『身延教報』第二十九卷第五号五月号、六頁。

(61) 『法華』（昭和十九年八月号）「余の身延入山」、一―二頁。

(62) 『昭和定本』では「断簡二七八」、二九六―四頁に同文が確認できる。

本論考執筆にあたり、本多日生記念財団の西條義昌氏に資料の提供をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。